

# 明治期の語法型教材

吉 岡 英 幸

キーワード

明治期 語法型教材 文法学習項目

## 1. はじめに

筆者は吉岡2000で、明治期に開発された日本語教材100種類余りの日本語教材の構成・内容の調査を行い、次の五つに分類した。日本語の文法体系を理解させることを主眼とした文法解説教材である文典型教材、文型的な学習項目を中心に構成された語法型教材、読本と呼ばれていた読解教材、かなや漢字学習のための文字教材、場面や話題を中心にそこで行われるであろう会話のモデルや表現の例を示した会話教材である。このうち語法型教材は、教師が教室で使用することを想定し各課の学習項目の量や文法項目の提出順が易から難へと段階的に配列されており、4技能を並行して学習されることが前提となっている語法総合教材と、文型的な学習項目が列挙されそれぞれに用法を示す例があげられている語法用例教材とに分けることができる。筆者は吉岡1999で、語法総合教材の6種類の教科書の文法学習項目を対象に、現代の初級文法学習項目と比較しどのくらい重なりがあるかを調査したが、本稿では語法用例教材のうち明治38年ごろまでに編纂されたものを対象として調査を行い、その文法学習項目から見た日本語教材の流れを明らかにし、現代日本語教材の源流を探ることが目的である。

## 2. 調査対象の教材

明治期の語法用例教材には次のようなものがある。台湾総督府民政局学務部『新日本語言集甲号』（明治29年、1896）、長谷川雄太郎『日語入門』（明治34

年、1901)、新智社編集局『東語完璧』(明治36年、1903)、金井保三『日語指南』壹卷(明治37年、1904)・貳卷(明治38年、1905)、李文蔚、畢祖誠『日語用法彙編』(明治38年、1905)、宝閣善教、権量『応用東語法教科書』(明治38年、1905)、文求堂編集局『日語全璧』(明治39年、1906)、振武学校『日本語会話教程』(明治39年、1906)、大宮貫三『日語活法』(明治40年、1907)、渡辺直助、楊汝梅『日語用法自習書』(明治40年、1907)、呉人達『東語大観』(明治40年、1907)。このうち『日語指南』と『日本語会話教程』については既にその編纂者や学習項目などについての詳細を明らかにした<sup>(1)</sup>。本稿ではそのほかの教材のうち、明治38年までに編纂された教材を対象とし、比較的早い次期の各教材の学習項目のうち、発音、文字表記、漢字、語彙などを除く、文法学習項目にしぼり、その教材の特徴を明らかにする。ただ初版本の所在が不明のものもあり、一部は明治38年以降に刊行されたものを対象とせざるを得なかったが、文法項目そのものの変動は、ほとんどないと思われる。

このうち、『新日本語言集甲号』は、「普通単語之部、普通話言之部、軍隊及警察用単語之部、軍隊及警察用話言之部」の四つの構成になっており、「単語之部」は単語が列挙されているだけであり、「話言之部」も「いそげ—もといそげ、せいいっぱいいそげ」「いいえ—いいえ どういたしまして」「いやだ—まんしゅうじんはいやだ」「いづらか—いづかでできるか、いくかかんにできるか」のように語句と例文が挙げてあるが、語句は系統だって選ばれたものでなく、数も少なくバリエーションがないため、調査の対象からはずした。したがって、『日語入門』、『東語完璧』、『日語用法彙編』、『応用東語法教科書』の4種類の教材を対象とする。

### 3. 語法型教材の構成・内容について

調査対象とする4種類の各教材の構成・内容は以下のとおりである。

#### a. 『日語入門』(長谷川雄太郎、明治34年2月発行、広東同文館編)

P1～P37は、五十音、鼻音、濁音、半濁音、拗音、転呼音、数目、月日、時刻、曜日、四季、方角、天文、地理、人倫、身体、宮室、草木、魚貝類、鳥、獸、虫、職業、舟車類、金石類、藥、貿易品の各項目ごとに、それぞれ語彙の例をあげたものである。

P38以降は、造語編として90の項目が立てられ、形容詞、助詞「の、と、に、が、を、は、で、も」、自動詞、存在詞、「こ・そ・あ・ど」、「ている」、「ます」、「であります」、「何〜か」というような項目に、それぞれの例をあげている。用例には部分的に中国語訳がつけてある。本書の造語編の第1～第90を調査対象とした。

b. 『東語完璧』（新智社編集局編、光緒29年：明治36年刊による<sup>(2)</sup>）

第1編「予習」は、発音と文字表記、数・助数詞の語例と中国語訳。第2編「説話法標準」は、授受、命令、依頼などの項目を立て、それぞれの例文とその中国語訳。第3編「問答法標準」は、「だれ、どこ、いつ、何、なぜ」などの疑問詞や、助数詞を使用した例文とその中国語訳。第4編「会話」は、「訪問、散歩、学校、天気、飲食、送信、諸商店、商売語、旅行、別れ、祝い事、人物」などの場面での会話例とその中国語訳という構成になっている。各課の終わりに、中国語を日本語に、日本語を中国語に訳す練習問題があり、第4編の「会話」のあとにその解答がのせてある。本書は文法項目を軸に構成されている第2編「説話法標準」と第3編「問答法標準」を調査対象とした。

c. 『日語用法彙編』（李文蔚、畢祖誠、光緒31年3月、光緒32年：明治39年10月訂正三版による）

第1編は、発音と文字について中国語で説明したもの。第2編は「単語」で、1課の「ア部」から始まり43課の「口部」まで、それぞれその言葉が語頭にくる語彙を列挙したもの。第3編「実用語彙」は、「です」「でしょう」「でした」「ございます」「ございません」「ます」「ましょう」「ません」「ました」「まして」のような156の項目を学習項目として立てている。初め項目の意味や用法について簡単な説明が中国語であり、その項目を含む例文とその中国語訳がある。て形・た形の提出順の場合でも、初め「行きます」「行きました」「行きます」というような形で提出して、後で「行って」「行った」と、易から難へ段階的に配列するなどの学習者への配慮が見られる。本書の第3編「実用語彙」を調査対象とした。

d. 『応用東語法教科書』（宝閣善教、権量、明治38年7月、明治39年6月再版による）

第1「音韻編」は発音と文字が学習項目である。中国語の解説と、語例など

にも中国語訳がついているが、五十音などにローマ字も併用しているのが目新しい。第2「話法編」は、名詞、動詞、関係詞（助詞）、代名詞、形容詞、副詞、接続詞、感動詞の品詞ごとに学習項目を立て、例文をあげている。例えば「でも」の項目では「雖也。用干名詞代名詞下 (Though)」と説明があり、「犬でも恩を知っています。雖狗尚知恩」などの例文が並んでいる。第3「補遺編」は、「ながら、ねばなりません、こと、になります、といいます、そう、かもしれません、つもり」などの項目をたてた「実用語」と、敬語をあつかった「常言及敬詞」の構成になっている。明治期中国語だけでなく英訳もつけた教材は珍しい。本書の第2「話法編」と第3「補遺編」を調査の対象とした。

#### 4. 語法型教材の文法学習項目

現在の初級教科書をもとに選ばれた文法学習項目を基準とし、それがこの明治期の4種類の語法型教材にどのくらい重なっているかを調べたものが次の表である。初級の文型項目は、『日本語能力試験出題基準』（国際交流基金）の4級と3級の「文法」によった<sup>(3)</sup>。二つ以上の語彙や文型の項目の場合、一つでもあればその初出の課を書いた。編纂者が文型として意識して織り込んだものかどうか疑問のものもあるが、原則としてその項目があれば全てとりあげた。

表の数字は、『日語入門』の場合、「造語編」の1～90課のうちの出ている課を、『東語完璧』の場合、最初の数字2または3は2編か3編かを、2番目の数字は章を、3番目は課を示す。2④1は、「2編説話法標準」の「4章有無」の「1課有、沒有」である。『日語用法彙編』の場合は、第3編の課を、『応用東語法教科書』は「第2話法編」の中の課を、「補」とあるものは「第3補遺編」の課を示す。

##### 1) 4級

##### A. 文法事項

##### A—I 文型、活用等

文 法 学 習 項 目	a 入門	b 東語	c 用法	d 応用
疑問詞を含む文 「は」＋疑問詞	28	3①	154	4

疑問詞を含む文 疑問詞＋「が」	47	3①	29	4
形容詞の現在形／過去形／否定形	67		1	補2
形容詞のテ形 Aくて	63		39	
形容詞の連用形＋動詞 Aく＋V	50	3②	7	6
形容詞＋名詞 Aい＋N	54	3②	148	5
形容詞＋の Aの				4
形容動詞の現在形／過去形／否定形			1	
形容動詞のテ形 ANで			58	
形容動詞の連用形＋動詞 ANに＋V	65		85	6
形容動詞＋名詞 ANな＋N	36		128	5
形容動詞＋の ANなの				
存在文 NにNがある／いる	18	2④2	23	3
存在文 NにNがQある／いる	40		9	3
所在文 NはNにある／いる	55	3②	25	3
動詞の現在形／過去形／否定形	39	2⑥1	13	補2
動詞の自他 NがV／NをV				
動詞のテ形 Vて	23	2③1	107	3
動詞のテアル形 Vてある	23		24	補1
動詞のテイル形 Vている	23	3①	124	3
動詞のナイデ形 Vないで				
名詞述語文の現在形／過去形／否定形	64	3①	1	補2
名詞述語文のテ形 Nで		3③2		
名詞＋の＋名詞 NのN	7	2①4	1	3
名詞＋の（後の名詞省略）私のです	51		41	4
連体修飾＋名詞 私の買った本	64	2③7	42	

#### A—II 助詞、指示語、疑問詞等

疑問詞 何	28	3⑤1	41	4
疑問詞 だれ／どなた	47	3①	2	4
疑問詞 いつ	79	3③	109	4

疑問詞 いくつ	79	3④1		
疑問詞 いくら	80	3④1	36	4
疑問詞 どこ	55	3②	33	4
疑問詞 どれ	61			4
疑問詞 どう	75	3⑤3	48	
疑問詞 どんな	63	3⑤2	90	4
疑問詞 どのぐらい	80			
疑問詞 なぜ／どうして	75	3⑤3	48	6
疑問詞＋か 何か	47		29	補2
疑問詞＋も＋否定 何も	47	3①		
これ、それ、あれ	21	2①3	3	4
この、その、あの	21	2①3	40	4
ここ、そこ、あそこ	24	3②	13	4
こちら、そちら、あちら	60	2⑤		4
が 友達が来ました（主語）	13	2⑥1	6	3
を 私はパンを食べます（目的語）	14	2①1	31	3
を 家を出ます（起点等N＋を＋自）	59		56	
に ここに本があります（場所）	31	2④2	9	3
に バスに乗ります（到達点）	15	2⑥2	146	7
に 7時に起きます（時間）	43	3③2	80	3
に 本を買いに行きます（目的）	57	3④2	77	3
に 1日に3回行きます（期間に回数）				
で 公園でテニスをします（場所）	56	3②	87	3
で バスで行きます（手段方法）	17		9	3
で 木で机を作ります（材料）	38	3⑤1	86	
で 病気で学校を休みました（理由）			88	
で 全部で百円です（数量）	80			
へ 東京へ行きます（方向）	57	3③1	8	3
と 本とノート	10	2②2	92	7
と 妹と（いっしょに）	53		29	7

と 友達と会います (動作の相手)			36	7
から、まで 家から学校まで (場所)	59		107	3
から、まで 1時から3時まで (時間)		3③2	109	3
や 切手やはがき	86			7
は 私は学生です	16	3①	1	3
は テニスは外でします (目的語)		2⑤	17	
は 酒は飲みません (否定と共に)		3①		6
は 私は行きますが、兄は行きません (対比)		2④1	36	補2
も 私は行きます。兄も行きます	22	2②3	89	7
も 本もノートもあります	86	2⑤	91	7
格助詞+は／も へは、へも、には	48	2③3	9	3
か 本かノート				補1
か 行くか行かないか	66			7
など 本やノートなど	59	3⑤2	41	
ぐらい 30人ぐらい		3④2	57	6
だけ 果物だけ食べました			68	6
しか 果物しか食べません		3④1		
て 朝起きて散歩します (単純接続)	51		9	7
て 本を見て歌います (副詞的, 方法)	76			3
て 風邪をひいて休みました (理由)	86		22	7
が すいませんが、本を貸して下さい	65		29	7
か これはあなたの本ですか	28	3①	32	3
か 先生ですか、学生ですか				
ね 今日はいい天気ですね				補2
よ その本はおもしろかったですよ				
わ 私もいくわ				
中 1年中暑いです		3⑤3	30	
たち／ども／方 私たち／あなた方	19	2③3	9	4
あまり～ない あまり食べません				
1～10000／一つ (数)	79		9	1

枚／冊／本等（助数詞）	82	3④2	115	5
～月／～日／～曜日	79	3	8	1
～時～分（時刻）	43	3③2	9	3
～時間／～分間（時間）	79		60	7

## B. 表現意図等

依頼 Nを下さい	69	2①1	115	3
依頼 ～て下さい	70	2①4	116	3
依頼 ～ないで下さい				
依頼 Nを／Vて下さいませんか		2③5	118	
勧誘 Vましょう	54		10	3
勧誘 Vませんか			145	
希望 Nがほしい	74	2③8	46	補1
希望 Vたい	74	2③8	43	補1
逆説 ～が	75	2④1	30	7
同時 V時	89		7	
同時 Vながら			140	補1
前後 Vてから			112	7
前後 Vた後（で）／Vたのちに			58	
前後 V前（に）				
推量 でしょう／ましょう	46	3①	2	2
並立 VたりVたり				7
変化 Aく／ANに／Nになる	79	3④1	7	6
変化 Aく／ANに／Nにする	79	3⑤1		7
変化 もう＋肯定／否定	41		143	3
変化 まだ＋肯定／否定	67	3①	12	3
名称の導入 ～というN			120	補1
理由 ～から	41	3⑤3	111	7



2) 3級

A. 文法事項

A—I 文型、活用

文 法 学 習 項 目	a 入門	b 東語	c 用法	d 応用
受身 V (ら) れる	86		29	2
敬語 おVになる		3③2	41	4
敬語 V (ら) れる				
敬語 おN／ごN		3③1	44	補2
敬語 おVする				補1
敬語 おVいたす				
敬語 (お) A ございます	60	2③8	44	5
敬語 AN／Nでございます	55	3③1	4	
使役V (さ) せる		2③3		2
使役+受身 V (さ) せられる				
～ずに Vず (に)			91	
文の名詞化 ～の	37		127	6
文の名詞化 ～こと	34			7
文の名詞化 ～ということ			52	
補助動詞 Vていく／Vてくる	58		64	3
補助動詞 Vてみる	23	3②	29	7
補助動詞 Vてしまう			134	補1
補助動詞 Vておく	56	3⑤1		6

A—IⅡ 助詞、指示語等

こんな、そんな、あんな	64			
こう、そう、ああ				
縮約形 ～ちゃ				
までに 9時までに来て下さい				
も 50万円も持っている				

ばかり テレビばかり見ている			59	6
でも お茶でも飲もう (例示)				
疑問詞+でも 何でも／だれでも	48	3④2	30	7
とか 本とかノートとか				
し 頭もいいし体も丈夫です			126	7
の いっしょに行くの			40	
だい どうしたんだい				
かい いっしょに行くかい				
Aさ／ANさ 暑さ／きれいさ	40		65	5
らしい 男らしい人				
Aがる／ANがる 暑がる／嫌がる				

## B. 表現意図

意志 V (よ) うと思う	78	3⑤1	29	
意志 ～つもりだ	79		78	補1
意志 V (よ) うとする		3⑤3		
意志 Vことにする 行くことにする				
意志 Nにする		3⑤1		
依頼 おVください				補2
依頼 (さ) てください		2③3		
引用 ～と言う	30		75	補1
開始 Vはじめる			61	7
開始 Vだす				
過度 Vすぎる				
可能 Vことができる	77		42	6
可能 V (ら) れる	65	3④2	121	2
勧告 ～ほうがいい				
希望 Vたがる				
義務 ～なければならない／ねばならない	77	3⑤3	123	補1
逆説 ～のに			64	7

許可	～て（も）いい／でもかまわない		3④2		7
禁止	～てはいけない／てはならない	73		30	補1
禁止	～な	73		100	
経験	Vたことがある	77		29	
継続	V続ける				
終了	V終わる				
受給	あげる／もらう／くれる	69	2①1	50	補1
受給	～てあげる／もらう／くれる	70	2①4	70	補1
受給	さしあげる／いただく／下さる				
受給	～てさしあげる／いただく／下さる				
条件	～ば	50	3④1	103	7
条件	～たら			105	7
条件	～なら（ば）		2④1	101	7
条件	～と	41	3⑤3	93	7
状態放置	～まま 眼鏡をかけたまま				
譲歩	～ても／でも 辞書をひいても	50	3④2	48	3
疑問詞+	～ても／でも どんなことがあっても			66	
推量	～と思う	29	2⑤	64	6
推量	～らしい				補1
推量	～かもしれない			133	補1
推量	～はずだ／はずがない				
推量	～ようだ	62		29	補1
伝聞	～そうだ			48	補1
難易	Vやすい				
難易	Vにくい				
比較	～は～より	85	3④1	136	5
比較	～と～とどちら／～ほう			50	補1
比較	～ほど～ない			29	6
比喩	～よう		3⑤2	131	補1
不必要	～なくてもいい／かまわない				

方法 ～かた 書き方				
命令 V命令形 行け	71			
命令 Vなさい	71	2②1	48	補1
目的 Vため (に)			53	
様態 ～そう				補1
理由 ～ので	82		135	7
理由 ～ため (に)			91	7
～は～が 私は犬が好きです	34			
～は～が 象は鼻が長いです	75			
～がする 音がする／においがする				
Vことがある 休むことがある			63	
Vことになる 話すことになった				
～のだ どこへ行ったのですか		3④2	41	4
疑問詞＋～か だれが来たかわかる		3⑤2	48	
～かどうか 来たかどうか知らない				
～ように言う 来るように言った				
～ようにする 忘れないようにする				補1
～ようになる わかるようになる				
Vところだ 行くところだ				

これをまとめると次のようになる。

### 3級・4級別に見た項目

	全項目	a 入門	b 東語	c 用法	d 応用
4 級	115	82 (71%)	65 (57%)	88 (78%)	84 (73%)
3 級	100	33 (33%)	27 (27%)	50 (50%)	48 (48%)
計	215	115 (53%)	92 (43%)	138 (64%)	132 (61%)

### 内容別に見た項目

	全項目	a 入門	b 東語	c 用法	d 応用
A I	44	27 (61%)	20 (45%)	32 (73%)	30 (68%)
A II	83	53 (64%)	42 (51%)	54 (65%)	54 (65%)
計	127	80 (63%)	62 (49%)	86 (68%)	84 (66%)
B	88	35 (40%)	30 (34%)	52 (59%)	48 (55%)

4種類の教材とも3級の項目より4級の項目が多く、より基本的な文法項目に対する認識があったと言える。特に『日語用法彙編』と『応用東語法教科書』は、重なり項目数が6割を超えており、初級段階における理解、表現のための実用的な教材であったことがわかる。『日語入門』は、Bの表現意図より63%あるAの助詞や指示語などのバリエーションに特徴がある。『東語完璧』は、617ページという最も大部の体裁を持っているが、文法学習項目数は最も少なく、あまり実用的な教材とは言えないことがわかる。

## 5. 編纂時期順に見た語法型教材の文法学習項目

明治30年代の早い時期に編纂された主な語法型教材の文法学習項目を編纂年次順に概観すると以下ようになる。比較を容易にするため、項目数は省略しパーセントのみ記す。「台湾」は、台湾総督府『台湾適用会話入門』（明治33年、1900）、「初階」は、泰東同文局『東語初階』（明治35年、1902）、「語文」は、振武学校『語文教程巻1』（明治37年、1904）で、全7巻のうちの巻1、「指南」は、金井保三『日語指南壱巻、貳巻』（明治37・38年、1904・1905）である。

	33 台湾	a 入門	35 初階	b 東語	37 語文	37・8 指南	c 用法	d 応用
4 級	52%	71%	62%	57%	39%	83%	78%	73%
3 級	18%	33%	31%	27%	5%	59%	50%	48%
計	36%	53%	47%	43%	23%	72%	64%	61%

この表で見ると、日本語の文法項目の多様性より、日本語の基本的な構文を理解させることを重視した『語文教程巻1』を除くと<sup>(4)</sup>、明治33年の『台湾適用会話入門』以降、教材によって増減はあるものの文法学習項目は上昇していき、明治37・8年になって、7割を超える『日語指南』を筆頭に、6割を超える『日語用法彙編』『応用東語法教科書』が開発されていった。これは大量の留学生が中国から来日し、明治36年あたりから38年にかけて多くの日本語教育機関が開設されたことに起因する。各機関は必要に迫られ日本語教材の編纂作業を開始し、多くの教材が世に出ることになった。現在、ほとんどの初級教科書が文型を中心に構成されているが、その文法学習項目の6割から7割が組み

込まれた日本語教材が、この時期に既に開発されていた。

現在、主流となっている文型を中心に構成された日本語教材の源流は、明治30年代に始まったと言えるのである。

本稿執筆に当たって使用した資料の収集・分析は、早稲田大学特定課題研究助成費（課題番号2000A-546）の成果であることを付記しておく。

#### 注

- (1) 『日語指南』については吉岡2001を参照、『日本語会話教程』については吉岡2002を参照。
- (2) 東京都立中央図書館の実藤文庫本によったが、この本には奥付がなく、同図書館の目録でも「清光緒29刊」としている。
- (3) 国際交流基金、日本国際教育協会編 [1994]『日本語能力試験出題基準』による
- (4) 『語文教程』を含む振武学校の教材については吉岡2002を参照

#### 参考文献

- 吉岡英幸（2002）「振武学校の日本語教材」『早稲田大学日本語教育研究』創刊号
- 吉岡英幸（2001）「金井保三著『日語指南』の文法学習項目」『講座日本語教育』第37分冊
- 吉岡英幸（2000）「明治期の日本語教材」『日本語教育史論考』凡人社
- 吉岡英幸（1999）「明治期の日本語教科書の「文型」」『日本語研究と日本語教育』明治書院